

令和3年度文化芸術による子供育成総合事業－巡回公演事業－
ワークショップ①&本公演（1日目）実施計画書【コロナ対応版】

制作団体名	一般社団法人こども映画教室
公演団体名	こども映画教室

内容
【ワークショップ①】 映画『霧の中のハリネズミ』を鑑賞する。 映画鑑賞後、映画に関する振り返りを通して、映画の理解を深める。 【メインプログラム】 1 チーム4～5人ほど（できれば他学年混成チーム）に分かれ、チームごとにいくつかのルールをもとにiPadを使用して『赤いボールの冒険』を撮影する。 撮影後は、チームごとにiPadで編集をする。

タイムスケジュール（標準）
※時間は学校ごとに異なります 9:00～9:40 『霧の中のハリネズミ』鑑賞 9:40～10:10 映画の振り返り 10:10～12:15 チームごとにiPadで撮影・編集

派遣者数 ※派遣者数の内訳を御入力ください
15名 特別講師1名／プロデューサー1名／アシスタントプロデューサー1名 映画制作チーフチームリーダー9名／メイキング撮影監督1名／メイキングスチール撮影監督1名／テクニカルマネージャー1名 合計15名 ※派遣人数をなるべく少なくするために準備時間などを十分にとることで、テクニカルマネージャーを2名減らす。

学校における事前指導
特になし

令和3年度文化芸術による子供育成総合事業—巡回公演事業—

ワークショップ②（2日目）実施計画書【コロナ対応版】

制作団体名	一般社団法人こども映画教室
公演団体名	こども映画教室

演目
【ワークショップ②】 上映会（舞台挨拶） 1日目に撮影した映像を上映し、みんなで観る。 自分たちでつくった映画がどのような映画だったかを自分たちなりに考える。 講師の監督からの講評と質疑応答。 最後に事後用ワークシートをこどもたちに配布し、理解を深めてもらう。

派遣者数 ※派遣者数の内訳を御入力ください
15名 特別講師1名／プロデューサー1名／アシスタントプロデューサー1名 映画制作チーフチームリーダー9名／メイキング撮影監督1名／メイキングスチール撮影監督1名／テクニカルマネージャー1名 合計15名 ※派遣人数をなるべく少なくするために準備時間などを十分にとることで、テクニカルマネージャーを2名減らす。

タイムスケジュール（標準）
※時間は学校ごとに異なります 13:00～13:40 1日目に撮った映像を上映&気づいたことをディスカッション 13:40～13:50 講師コメント&質疑応答。感想ワークシートを配布する。

実施校への協力依頼人員
メインプログラムの撮影時にこどもたちの安全確保のために各チームブロックごとに1名ずつ帯同をお願いします。（チーム数は学校によって異なるため要相談）

演目解説

一般的に、子どもたちが映画を鑑賞するときは、「完成された映画を観る」という姿勢で映画を観ている。一方で別の映画の楽しみ方として、単に受信者ではない、観ている人が脳内で映画をつくりあげする方法もある。しかし、そのように“映画を観ている「私」”を大切に、映画に対して「私なりの考えを持つこと」や「自分なりにその映画をうけとり、自分たちの頭の中で映画を作り出す」という姿勢で映画鑑賞をしている人は少ない。それは観る側にも力が必要なことであり、国民の多角的な芸術鑑賞能力の向上のためには、このような映画鑑賞における“自立的な観客”である姿勢を子どもたちから大事にし、それを体験できる機会が必要である。その発想力の育成や芸術鑑賞能力の向上を目指して本企画を実施する。

ワークショップ1回目は、『霧の中のハリネズミ』を上映し、鑑賞する。現実世界では感情を持たないはずの風船に対して、子どもたちには『霧の中のハリネズミ』の内容を振り返りながら、登場するキャラクターの感情を考えてもらい、映画に対して能動的な姿勢を持ってもらうことを目指す。

メインプログラムとしては、生きていない、感情を持っていないボールを生き生きと映画の中で見せるにはどうしたらいいのかを子どもたちに考えてもらい、実際にそれを撮影してもらう。子どもたちなりにチーム内でコミュニケーションを図り、ボールに感情をつけてもらい、実際に手を動かしながら映画を内側から体験する。

ワークショップ2回目には、メインプログラムで撮影し、編集したものを鑑賞する。子どもたちは自分たちのつくった映画がどのような映画だったかを、自分たちなりに考えてもらい、“主体的な観客”として映画を楽しんでもらうことを目指す。

児童生徒の公演への参加方法、公演に参加させるための工夫

大人は「手出し・口出ししない」が、子どもたちの創作にあたり、もっと面白くできるのではないかということ、映画をつくる立場の人として伝えることによって、子どもたちの創作意欲や映画に対する考えを深められるようにする。

児童生徒とのふれあい

撮影をする際に、チームを見守る大人に映画制作のプロを配することにより、子どもたちは「本気の映画人」と出会うことができる。